伊豆沼・内沼の自然再生

伊豆沼・内沼自然再生全体構想・実施計画（第2期）の概要

～ひと・みず・いきものが織りなす輝く未来へ～

マガンの朝の飛び立ち（冬）

沼一面のハス群落（夏）

伊豆沼・内沼は、宮城県北部の登米市と栗原市にまたがる大小2つの淡水湖沼です。

国内最大級の水鳥の越冬地で、国際的にも重要な湿地であることから、1985年には、国内で2番目に「ラムサール条約※湿地」に登録されました。

伊豆沼・内沼の豊かな自然を保全し、次世代に引き継ぐため、専門家や地元関係者、行政機関など多様な主体が協力し、自然再生事業に取り組んでいます。

（※国際的に重要な湿地や生きものの保全・利活用等を目的とした条約）

伊豆沼・内沼は生きものの宝庫

カキツバタ

ゼニタナゴ

マガン

ガガブタ

伊豆沼・内沼は、冬の渡り鳥や夏のハスが有名ですが、他にも、1年を通じて1,500種以上の多様な生きものが確認されており、絶滅危惧種や天然記念物などの貴重な生きものも生息する重要な湿地となっています。

オオセスジイトトンボ

アサザ

カラスガイ

オオヒシクイ

伊豆沼・内沼で見られる
天然記念物や絶滅危惧種

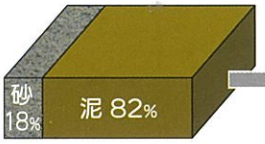
伊豆沼・内沼をめぐる4つの課題 ～脅かされる生態系・変わる姿～ 1

伊豆沼・内沼の自然環境は、私たち人間の生活様式の変化に伴い、周辺の開発や富栄養化、外来生物などの影響を受け、生息する生きものの種類の減少や水質悪化など沼の姿が大きく変わっています。

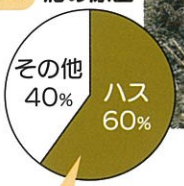
水質汚濁と浅底化の進行

- 水質を示すCOD※等の値が環境基準値を満たしておらず、夏には、酸欠状態となることがあります。
- 水質汚濁は、強風による水底の泥の巻き上がりや泥からの栄養塩類の溶出のほか、数多く飛来するマガンの糞等が原因と考えられています。
- 近年は、特に枯れたハスが泥化して堆積し、水深が一部浅くなってきており、生態系への影響が懸念されています。

毎年約10,000m³の砂や泥が沼に堆積



泥の原因



枯れたハス

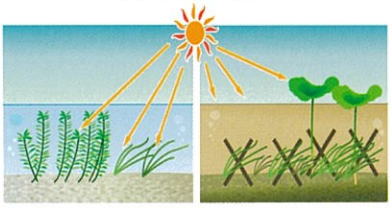
毎年、枯れたハスが約5,000m³堆積している可能性

※COD：有機物による水質汚濁の状況を示す代表的な指標

生物多様性の劣化

- ハス等の水質汚濁に強い植物が増加し、他の水生植物が減少しています。
- 外来魚が増加し、エビや小魚等の在来の魚介類が減少し、それらを食べるミコアイサ等の水鳥も大きく減少しています。
- ハスやハクチョウ、マガン等特定の生物種が目立ち、多種多様な生きものが生息しにくい状態になっています。

水質悪化の影響



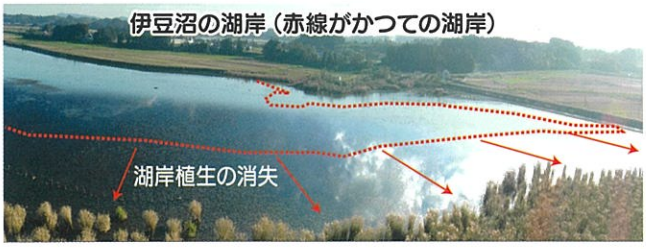
ハス等の増加により、
光が必要な水面下の植物が減少

外来魚に食べられた
在来魚の様子

エコトーン（湖岸域）の消失

- 沼の湖岸域は、エコトーンと呼ばれる水域と陸域にはさまれた独特な生態系で、かつての伊豆沼では、マコモ群落などの植生が拡がり、多種多様な生きものが生息していました。
- 沼では、洪水と波浪等の影響により、約90haのエコトーンが消失し、植物やオオセスジイトトンボ等の昆虫類や鳥類が減少しました。
- 植生が無いため砂が流出し、砂にすむカラスガイや沈水植物等多くの生きものが影響を受けています。

伊豆沼の湖岸（赤線がかつての湖岸）



地域活性化と沼の利活用

- かつて、沼では盛んに漁業が営まれ、エビやジュンサイなどの伝統的な食文化やヨシ刈り等の地域文化が育まれ、沼を利用することが沼の保全に繋がっていました。
- 自然保護の意識の拡がりと生活様式の変化等から、積極的な利活用の機会が減少し、沼と地域活性化への結びつきが不十分な状況になっています。

かつての沼の利活用の様子

沼での漁の風景

湖岸のヨシ刈り

伊豆沼・内沼自然再生協議会

沼の豊かな自然を保全・再生していくために、共に考え、実践していくための場として、地域関係団体、NPO、学識経験者、行政等多様な主体が参加し、自然再生推進法（平成15年1月施行）に基づき設立されました。協議会では、伊豆沼・内沼の目指すべき姿を全体構想に掲げ、協議・検討しながら、自然再生を進めています。

設立年月：平成20年9月／協議会委員：33名（令和2年4月現在）
運営事務局：公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
環境省東北地方環境事務所・登米市・栗原市・宮城県

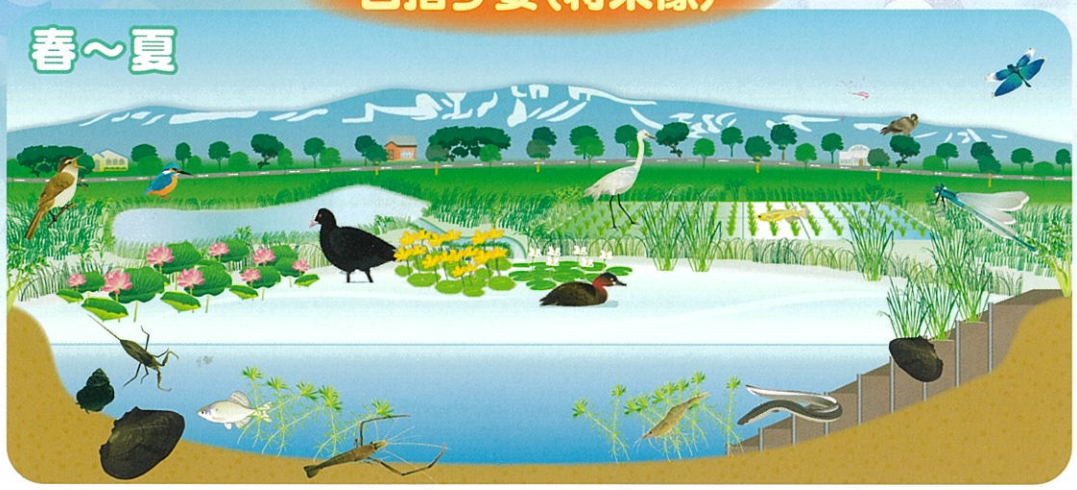
自然再生の目標と目指す姿（将来像）

2

目標

豊かな生物多様性と健全な水環境の回復を図り、人と自然が共生する伊豆沼・内沼を目指す

目指す姿（将来像）



- 在来の生きものが回復し、生物多様性が保全されます。
- エコトーンが創出され、水域、水辺、周辺水田など多様な自然環境を様々な生きものが利用し、それぞれの生態系が保全されています。
- 多種多様な生きものが生息するために必要な水質が改善され、整っています。
- 自然豊かで安らげる沼の自然を求め、多くの渡り鳥たちが飛来します。
- 沼の貴重な資源を活かし、体験・交流・産業の場として地域活性化に貢献し、周辺の農村環境と共存しながら次世代に継承されます。

目標の達成度を教えてくれる生きものたち

目指す姿（将来像）の実現度を確認するため、指標となる生きものの調査をしています。

外来魚の減少や、沼の水質等が良くなると数が増えます。

魚類が増えると、食べるために集まってくるので数が増えます。

外来魚の減少や、沼の水質等が良くなると数が増えます。

沼の水質や光環境等が良くなると数が増えます。

生息場所となるエコトーンが回復すると数が増えます。

生息場所となるエコトーンが回復すると数が増えます。

これまでの取組（第1期：2010～2019年度）

3

希少種の復元・増殖活動や、外来魚等の防除活動を総合的に実施し、「生物多様性の保全と再生」に向けた取組を進めてきました。

ハス等刈払い

外来魚防除活動

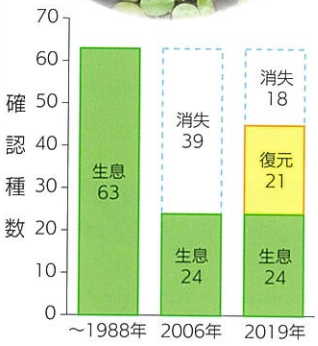
水生植物の復元・増殖

カラスガイの育苗

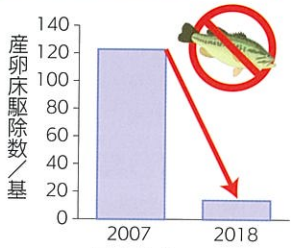
● 取組により得られた成果

外来魚が減少し、在来魚が回復したことにより、それらを食べる水鳥も戻り、希少魚も再確認されました。また、多くの水生植物の復元等の成果が得られたほか、環境学習や保全活動も行われました。

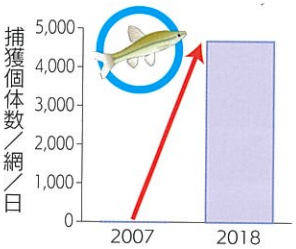
生物多様性の回復



水生植物の復元



外来生物の減少



魚介類の回復

水鳥の回復

希少魚の再確認

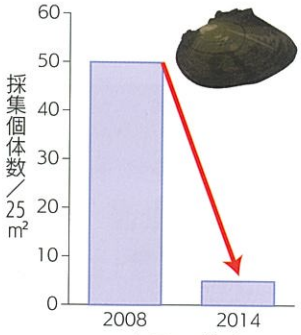
普及啓発の推進

環境保全活動

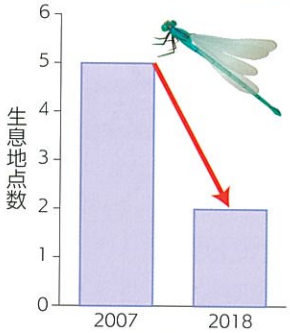
学習施設のリニューアル

● 継続する課題

時間のかかる課題や複雑で難しい問題があり、引き続き取組が必要です。

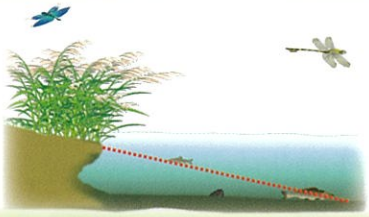


カラスガイ



オオセスジイトトンボ

エコトーンに生息する生物種が回復していない



エコトーン消失の進行

水質汚濁・埋まる沼

沼の利活用不足

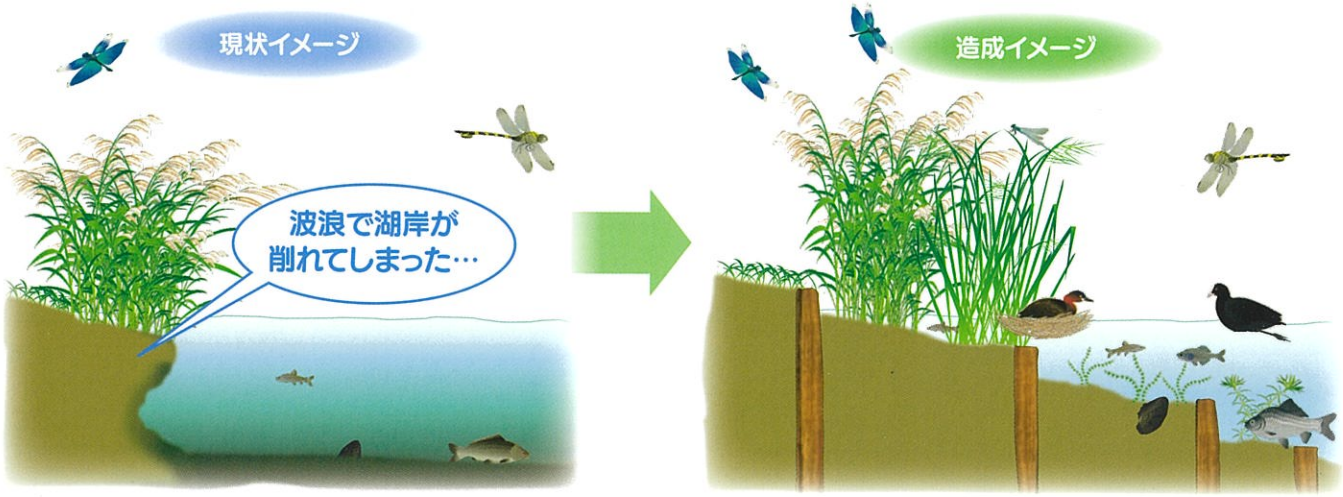
これからの主な取組（第2期：2020年度～）

今後の対策は？

第1期の成果と課題を踏まえ、次の4つに焦点を当てて進める計画です。

新たな取組　エコトーンの創出

消失したエコトーンを造成し、そこに生息する生きものの復元を目指します。



造成手法の検討及び試験施工を実施し、自然環境への影響を見ながら進めます。

施工例　湖岸の沼内に板柵等を設置し、覆砂して水生植物を植栽

生物多様性の回復　継続

- 在来生物の増殖・復元
- オオクチバス等外来生物防除　等

水質改善と浅底化の抑制　継続

- 水生植物の適正管理（ハス等刈払い）
- 底泥対策や水位管理　等

地域活性化と沼の利活用　拡充

- 自然資源を活用した観光業や地域産業との連携
- 環境教育や自然体験の充実による普及啓発　等

他の取組への効果

- 在来生物の生息・繁殖場所の創出
- 変化に富む環境による多様性の回復

＋

- 沼に占める砂質域の増加により、泥からの栄養塩の溶出量が減少し、水質悪化を抑制

＋

- 自然資源の回復
- 環境教育の場・自然体験メニューの形成

生物調査等のモニタリングで評価・検証しながら、取組を進めていきます。

3つの活動の連携で

自然再生 そして 地域の活性化へ

環境関連団体・学識経験者ほか
実施者による各取組に対して専門的・技術的助言や研究を行うほか、自然再生活動に取り組みます。

行政機関ほか
さまざまな橋渡しや普及啓発のほか、助言等を行います。

地域住民・地元関係団体ほか
環境保全活動、沼の利活用、普及啓発等を行います。

「①まもって」増えた生きものや自然の景観を、
協議会で、さまざまに連携しながら「②つないで」、
さらに、「③活かして」いくことで、
地域の活性化に繋げることを目指します。

伊豆沼・内沼で
活動したい方を
お待ちしています！

発行・問合せ

「伊豆沼・内沼自然再生全体構想」及び「自然再生事業実施計画」（第2期）は、下記ホームページからご覧いただけます。

伊豆沼・内沼自然再生協議会運営事務局内

- 宮城県環境生活部 自然保護課
  022-211-2672
  https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sizenhogo/
- 公益財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
  0228-33-2216
  http://izunuma.org/